

佑啓

使命

ゆうけい

発行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

澁谷彰平

私は、父が転勤族であったため、幼少期を横浜、神戸、アメリカ等で過ごし、中学生になった頃から市原市の五井で育った。高校は、地元の市原中央高校に進学した。そこで、里見吉佑常務理事と高橋俊寿評議員と出会った。常務理事と高橋評議員とは、高校一年時のクラスが一緒で、当時の席順がいろいろお順であったため、苗字が「し」で始まる私の前の席に、苗字が「さ」で始まる常務理事がいて、高橋評議員も近くの席だった。常務理事と私は、八村選手の活躍で最近話題のアメリカのバスケットボールリーグであるNBAを見るのがお互い好きだったため、すぐに意気投合した。NBAの試合は、時差の関係で日本時間の午前中に行われるため、私と常務理事は授業中にもかかわらず、当時の携帯電話（いわゆるガラケー）を使ってNBAの試合結果を見ながら盛り上がりつつあった。

はいいい思い出である。なお、当時から真面目な学生であった高橋評議員は、常務理事と私が教師に怒られていたときに、少し遠くからその様子を窺っていた。そのような楽しい高校生活もあったという間に終わり、私は唯一得意であった英語を活かして国際的に活躍できるように弁護士になることを目指してアメリカへ留学し、常務理事は福祉について学ぶために都内の大学に進学し、高橋評議員は推薦で淑徳大学に進学して、それぞれ全く違う道を歩むことになった。



その後、アメリカでも色々あったが、紙幅の都合上、それらについては割愛する。そして、私はアメリカの大学を無事卒業し、アメリカで弁護士資格を取得するためにアメリカの法科大学院に進学

することも検討したが、費用などの関係で難しかったため、法律とは無関係のアメリカの民間企業で一年間働いた後、日本に帰国した。日本に帰国してからは、都内の外資系金融企業で働き始めたものの、弁護士になるという夢を諦めきれなかったため、一念発起して日本の法科大学院に進学することにした。

現在の司法試験制度では、原則として法科大学院を卒業しなければ、司法試験を受験することができないため、弁護士等を目指す人は、基本的に法科大学院に進学する。また法科大学院には、大学時代に法学部であった学生向けの既修者コース（二年制）と、それ以外の学生向けの未修者コース（三年制）がある。私は、法科大学院に入学するまで日本の法律を全く勉強したことがなかったため、未修者コースに進学した。

これは法科大学院に入学した後、に気づいたことだが、私が進学した法科大学院の未修者コースの学生の大半は、実際は法学部出身であったにもかかわらずあえて未修者コースに進学した「隠れ既修」であった。私のような純粋な法律の未修者は、私の学年に二割もいなかった。未修者コースというのは、だから、法律のことを一から教えてくれるのだろうと高をくくっていた私は、入学早々周りの学生間で飛び交う法律用語を含む会話についていけず、その知識の差に愕然とした。冷静に考えてみれば、未修者コースと既修者コースは一年間しか在籍期間が変わらないということは、未修者コースの学生はその一年間で法学部生が四年かけて勉強してきた内容を習得しな

ければならないということである。そうすると、法科大学院に入学する前からある程度法律に関する知識がなければ、かなり厳しい道になることは容易に想像ができる。そのような崖っぷちの状況にあつたため、法科大学院に在籍していた三年間は、それまでの二〇数年間の私の人生で勉強してきた量の数倍は勉強したと思う。そして、その努力が実ったのか、それとも運が良かったのか、なんとか二度目の受験の平成二十八年年度の司法試験で合格することができた。



弁護士になるためには、司法試験に合格した後に、一年間の司法修習に参加する必要がある。私も司法試験合格後、すぐに司法修習に参加した。司法修習が始まったばかりの平成二十八年十二月頃、高校卒業後もたまに連絡をとりあっていた常務理事が、司法試験の合格祝いをしてくれると言うので、久しぶりに会うことになった。

当日、常務理事に司法試験の合格を祝ってもらい私も気分が良くなっていたところ、突然彼が真面目な顔つきになり、私に対して、佑啓会の評議員に就任してくれないかと打診をしてきた。当時、社会福祉法人についてろくに知識のなかった私は、家に帰ってから、司法試験後放置していた六法を慌てて開き、社会福祉法人の評議員

について調べてみた。

調べてみると、社会福祉法人の評議員会及び評議員は、平成二十九年四月一日から社会福祉法人にその設置及び任命が義務付けられる制度であり、厚生労働省によると、「評議員会は、法人運営の基本ルール・体制を決定するとともに、役員の選任・解任等を通じ、事後的に法人運営を監督する機関として位置付けられています」と説明されていた。それを見て私は、そのような責任重大な役割を、まだ弁護士としての経験が浅い私に務めることができるのか不安に思った。

また、評議員の選任基準について、社会福祉法は「評議員は、社会福祉法人の適性な運営に必要な識見を有する者のうちから・・・選任する」と定めていた。社会福祉法人についてろくに知らなかった私に、果たして「適性な運営に必要な識見」があるのか、甚だ疑問であった。

しかしながら、更に調べていくうちに、評議員になるためには社会福祉に関する資格等は特に必要なく、それぞれの専門分野における知識や経験を活かして社会福祉法人をサポートすることも、評議員の役割とされていた。その点、たしかに法人が法令を遵守した運営をするにあたって、弁護士以上に適切なアドバイスができる職業はないであろう。また、弁護士の職務を規律する弁護士職務基本規程は、弁護士の使命を「基本的人権の擁護と社会正義の実現」とし、さらに「弁護士はその使命にふさわしい公益活動に参加し実践するように努める」と定めている。公益性の高い社会福祉法人をサポート

トすることは間違いなくこの「公益活動」に該当するであろう。

そして何より、常務理事が将来佑啓会を背負って立つ存在になったときは、私が弁護士としてサポートしたいと思った。そのため、今のうちから佑啓会にかかわらせてもらい、これまで佑啓会を立ち上げて発展させてきた理事長をはじめとする大先輩方から、様々なことを学ばせてもらう必要があると感じた。

そのため、私は、分不相応であることは認識しながらも、佑啓会の評議員への就任の打診を受けることにし、評議員就任後から現在まで様々なことを学ばせてもらっている。

以上が、私が佑啓会にかかわらせてもらうに至った経緯である。



以前理事長から、佑啓会の設立から現在まで、佑啓会をサポートしてくださっている弁護士の白石理事と公認会計士の鈴木監事は、高校三年時にあいうえお順の席順で、理事長のすぐ後ろの席だったことが出会ったきっかけと伺ったことがある。常務理事と私と高橋評議員の話と重なる部分があり、その偶然に非常に驚いた。これからも、大先輩方から様々なことを学ばせてもらい、私も少しでも佑啓会に貢献できるよう、努力していきたいと思う。（社会福祉法人佑啓会 評議員）

感謝しています

高橋 律子

社会福祉法人佐啓会の運営になってからあと数年で丸五年を迎えます。周りが畑と林に囲まれた地に都立にある会社の事務所かしらと思わせるような三階建ての素晴らしい施設が完成しました。本当に感謝しています。

八千代市福祉作業所の建て替えがなかなか進まず数えきれない程の市側との意見交換会もしましたが同じことの繰り返しでした。平成二十六年十一月に運営が佐啓会ふる里学舎に決定したことを知った時、私たちはホッとして本当に嬉しかったことを覚えてあります。そして決定から一か月もたない十二月十七日理事長さんが説明会に八千代に来て下さったのです。お話しの中で「皆さんはこれから先のことを心配しているんですよ。不安に思っているんですよ」と話されたことを今でも忘れることは出来ません。私たち親は自分が倒れたらどうしよう、子供を見えなくなったらと常に考えていたもので暗い顔をしていたんだなと思いました。でもその時、佐啓会ふる里学舎の仲間に入れていただけたのだと実感しました。



ふる里学舎 八千代

今から八年位前になりますが、主人が夜中の十二時頃に突然下っ腹が痛い背中を丸くして苦しがり朝まで我慢出来ないと言うので救急病院に連絡を取り見てもらえらることに。でも和典がいるのです。この夜中に息子を置いて行くわけにはいかないでも息子に「寝てなさいね」と言いつて病院に向かいました。応急処置をしても二時間程で帰ってきましてが静かに待っていてくれたのでホッとして胸をなで下ろしました。のちに尿管結石と解ったのですが息子に何かあつてからではとすごく恐ろしく二度とこういうことをしてはいけな



短期入所棟 デイルーム

平成三十年四月一日、社会福祉法人佐啓会に運営が変わってわずか三年でふる里学舎八千代がオープンしました。ガラス張りで見える正面玄関の右側にはパン工房があつて、三階には短期入所のフロアスペースとなつていて等々、五年前までは全く考えられていないことでした。建築場所が前の第一福祉作業所の後ろ側にある土地だったので子供たちや職員の方々と別の場所に引越すすることなく完成するまでいつも通りの生活が出来たことは本当によかったと思つています。また子供たちも仕事をしている現場の前を毎日通ることで建物が出来上がつていく様子が見られたのもいい経験をしたなと思つて

息子は十一月で四十六歳になりました。こたわりが強くいらつたパニックのある自閉症でいつも職員の方々にはお手数をおかけしています。

ふる里学舎八千代がオープンして間もなく短期入所の利用も開始しました。緊急時の安心感とこれから先のことを考えての体験利用が出来るといふことは本当にありがたく思つています。短期入所の四泊五日、果たして息子は最後までいられるだろうか悩ましました。思い切つてお願いしました。大きな荷物も用意して月曜日から金曜日まで泊まる日にちを本人から言つてきたのでこれは大丈夫かなと確認しました。今では「こんな感じが」と私に聞いてきます。やはり日中活動でいつもいてくれる職員の方々とお友達も夜も一緒にいることが本人にとっては一番安心することかなと思つています。また主人が手術のため二週間の入院をした時も短期入所と日中一時支援を利用し乗り切ることが出来ました。本当に助かりました。感謝しております。

毎年十月に予定されています家族会主催の研修会と施設見学の案内が私たちにも届きます。佐啓会が運営されている施設や他市の施設等、個人ではなかなか行けないのでこういう機会に参加できればと思つていま

私たちの今の思いは子供たちの住まいの場が八千代に欲しいと願つてあることです。それには学ぶことも必要だと考えています。いろんなことを教えていただけたらと思つていま

(ふる里学舎八千代 保護者)

いざ北海道へ

岩 渕 翼

この一年、いろいろな思いがぶつかり合った。強いチームに勝つため、一点をとるために、個人の考えをチームで話し合う期間が続いた。昨年から参加している市原市の野球大会では、リーグを勝ち上がりCリーグへと戦いの舞台を移した。野球と

は経験がものを言うスポーツ。我々は野球の難しさ、奥深さをたくさん経験していった。好投手、延長戦、追いかける展開、今までにない緊張感。チームを強くしてくれた。余談になつてしまふが、野球部で飲むお酒のつまみはだいたい野球の話。飲み会であんなに熱く語り合えるのは野球部くらいだろう。この飲み会がチームの強化につながっていると私はひそかに感じている。



昨年の激闘から一年。ふる里学舎野球部は一つの目標を達成すべく旭川空港へ降り立った。三年連続四回目の出場となった第三十七回社会福祉式野球大会。昨年の思いを胸にみんなの合言葉は「打倒旭山」。運命を占う抽選会で、順当に勝ち上がりれば準決勝で清水旭山学園とぶつかることとなる。目標までは二勝しなればならない。すると里見理事長から「一・二回戦は岩渕を温存する」と。野球は高い目標を掲げると足元をすくわれることが多い。私は勇気を振り絞つて、「理事長、明日の初戦は自分にかかせてください、明日勝たないと旭山と戦うことができないです。」

翌日、旭川の朝は一言でいうと、「さんみ」。イメージを遥かに上回る極寒の中、吐く息は白く、霜が溶け始めていたグラウンドでウォーミングアップが始まった。初戦の相手は鹿児島県代表、鹿児島ドリームス。先発は岩渕、玉田バッテリー。いつもと違う緊張感の中、危なげなく立ち上がる。相手投手はキレのあるスライダーを投げ込む、右のオーバースト。市原のリーグでかなり上のレベルだろう。案の定、打ちあぐねる。0-0で試合は進み延長戦へ突入。接戦になることは予測できた。(やっぱり)私は心の中で思った。この初戦を勝ち切るために昨日理事長に頼み込んだ。負けるわけにはいかない。ギアを一段上げ、一つひとつアウトをとっていく。九回裏、このままいくと勝利はジャンケンで決

まる・・・そんな空気が流れ始めた。アウト満塁のチャンス、バッテリーは女房役の玉田。この苦しい展開の最後は女房役のキャッチャーが試合を決めると相場は決まっている。ネクストバッテリーサークルにいた自分はどう試合に勝つた、そんな気持ちだった。玉田の放った打球はレフトを超えていき、女房の目に涙が光っていた。



打撃職人の三輪とエース岩渕

初戦を飾ったふる里学舎野球部は二回戦も玉田の満塁ホームランで完勝。見事、清水旭山学園との挑戦切符を得ることができた。迎えた準決勝。全てはこの日のために。緊張してはいないと言つたら嘘になる、試合前は落ち着かなかつた。初回から旭山の猛攻に合いながらも無失点で抑える。相手先発はエースであり元甲子園球児、簡単に点をとれる相手ではなかつた。試合は進み、中盤に自分のミスに付け込まれ三点を失う。この三点はめっちゃめっちゃ痛い・・・正直、先制点をとられたら負けだと心のどこかで思つていた。試合が終わつてみればこの三点だったと後々感じるようになる。攻めるふる里学舎打線はアウト三塁のチャンス、好投手相手に綺麗なヒットで点をとることはできない。バッテリーは打撃職人三輪。ベンチはここで動く。三塁ランナー川又はモーションと同時に走り出す。空振りできない中、バットを短く持ち叩きつけるバティーン。これぞ三輪の真骨頂。一点をなんとかもぎ取るもここまで。結果は三位。しかし、この一点が全国制覇



来年こそは全国制覇を！！

への鍵となつていくことを信じている。全国の舞台でまた一つ、良い経験ができた。勝つて当たり前前のプレッシャー、強い相手に勝つ難しさ。まだまだやらなければいけないことは山ほどある。だが、レベルアップしているのも確か。自信をもつて戦つていく。そして、気持ちよく送り出してくれる仲間がいるからこそ、全力で戦える。野球選手なら、勝つて優勝報告をすることが職場のみんなへの最大の恩返しなのではないか。来年は神戸での開催。必ず優勝旗を千葉に。

(ふる里学舎 支援員)

編集後記

令和元年も残り一ヶ月となりました。皆様今年の抱負は達成できましたでしょうか。入職から早八ヶ月、未だ自分の抱負が達成されていない事に気付いて、気持ちを締めなければ改めて感じます。冷たい空気に冬の訪れを感じる今日この頃。体調に気を付けて、良き新年をお迎えください。クリスマス会に向けて準備を進めるそよかぜキッズより、佐啓一〇号をお届け致します。(支援員助手 高根澤 菜月)